

《第 473 回（2020 年 7 月 9 日） 子どもの本の読書会記録》 参加者：7 人 文書参加：3 人

時間：10:00～11:30 場所：オーテピア 4 階研修室

『ビリー・ジョーの大地』 カレン・ヘス/作、伊藤 比呂美/訳 理論社

今月の課題図書は、2001 年 6 月の読書会で取り上げた『ビリー・ジョーの大地』の再読です。とはいえ、初めて読んだという参加者も多く、新鮮な会となりました。

舞台は 1934 年から 35 年の、アメリカ・オクラホマ。主人公のビリー・ジョーは、農業を営む無口な父と、厳格で家族想いな母との 3 人暮らしで、ピアノを演奏することが何よりも大好きな少女です。この時代、オクラホマでは「ダストボウル」という砂嵐と干ばつが断続的に地域を襲い、農家は大きなダメージを受けていました。ビリー・ジョーの住む地域も例外ではなく、父の育てている小麦は砂嵐になぎ倒され、家の中にまで土埃が入り込み、恵みの雨を待ち焦がれる毎日が続きます。そんな状況の中でもビリー・ジョーは、母のお腹に宿る弟の誕生を楽しみに、幸せに過ごしていました。しかしある日、そんな家族を悲劇が襲います。家庭内での無残な事故がきっかけで、母と弟を失ってしまうのです。この事故で自身も手に大ケガを負ったビリー・ジョーは、激変した日常を父と二人で歩み始めます。

物語は、ビリー・ジョーの視点で詩的に表現されていて、まるで一人の少女の日記を読んでいるかのようです。自信、夢、焦燥感、苛立ち、絶望、希望など、14 歳の少女の心に渦巻く感情が、深いところまで生々しく伝わってくる作品です。

次に、読書会参加者の感想を紹介します。

- この本が出版された頃に読んだがタイトルを控えておらず、読み返すことができなかった。読んでいる途中で気づき、感動した。訳者の 10 代の娘さん 2 人に下訳をしてもらったということで、生き生きした文体になっている。
- 20 年前に読書会で読んだとき、胸に突き刺さる印象を受けた。「好き」という言葉では言い表すことができない。ビリー・ジョーは、強いと言ってしまえばそれまでだが、14 歳の持つ感情がヒリヒリと伝わってくる。
- ビリー・ジョーの透明感がずっと貫かれていて、どんなにざらざらしていても、彼女の眼はキラキラしているようだった。彼女はいつかこの土地を出ていくかもしれないが、それでも心は故郷にあるのだろう。将来良いピアニストになると思う。

●一気に読んでしまった。本当に感動した。『大草原の小さな家』を思い出した。ビリー・ジョーがピアノを弾いたり、絵画を見たりというのは、苦しい時代の心の支えになっていたと思う。こういうものがないと、人は生きていけない。

●読みやすく、言葉には深みがある。ビリー・ジョーの意思の強さが、表紙の絵に現れている。自然の中で、いかに人間は無力なことか。不幸は続くが、めげないで乗り越えることで希望が生まれる。心があたたかくなる、良い本だった。

●自然の過酷さに打ちのめされ、終始口の中がざらつく。辛い中で、ピアノが心の支えになっている。いつの時代も共感できる普遍性を持っている物語だと思った。上質であるが、読者を選ぶ難しい本。過酷さの先にある希望を感じ取ってほしい。

●映画を見ている気分で読んだ。ビリー・ジョーに感情移入して読んでいたとしたら、母が事故に遭うシーンを乗り越えられなかったかも。最後は、ビリー・ジョーが素敵な大人の女性になる兆しが見えて、希望があった。

●何度読んでも、ビリー・ジョーの言葉はまっすぐに胸を貫き、彼女の生きた世界に瞬間的に連れて行ってくれる。「夢や希望が無かったら生きてはいけない」というビリー・ジョーの言葉は、最後に優しく心を包んでくれた。

●ノンフィクション作品かと思えるほどリアル。作中に出てくる砂の表現が秀逸で、乾燥した砂まじりの空気が感じられた。文体が小説形式ではない分、ビリー・ジョーの感情がダイレクトに伝わる。彼女と同じ年頃の子にぜひ読んでもらいたい。

●すごく読みやすい、というのが最初の印象。情景も目に浮かびやすかった。作者について調べると、舞台とは全く違う時代と地域で生まれ育ったことが分かり、こんなにもリアルな作品を作ることのできる文章力とリサーチ力に感服した。

次回 9 月 10 日（木）10:00～11:30 オーテピア 4 階集会室

□『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』

ブレイディみかこ/著 新潮社